陶淵明のトポス ――「桃花源」と「田園」――

渡邉登紀

「桃花源記」と「歸去來兮辭」は陶淵明の作品の中でも特に広く知られている作品である。これらの作品に描かれる二つのトポス――「桃花源」と「田園」――が後世の文学に与えた影響は極めて大きく、それぞれのトポスについて多くの研究がこれまでなされてきた。では、陶淵明文学全体を俯瞰すると、この二つのトポスはどのような関係にあるのだろうか。この二つのトポスの関係性を明らかにすることが小論の目的である。

「桃花源記」には同時期にその類似説話がいくつか存在することから、当時流伝していたプロットをもとにして陶淵明が創作した物語、いわばパロディであるとする見解が多く支持されており、小論もその説を支持する方向にある。(一) 一方の「歸去來兮辭」は官職を辞して故郷に帰るという隠遁宣言を著した自伝的作品である。この二つの作品はそれぞれフィクションとノンフィクションに分類される一方で、「桃花源」と「田園」は重複する空間として捉えられがちである。だが、この二つの作品には「舟」によって新たなトポスへと移動するという共通点があり、その「舟」を切り口として両作品を比較するならば、「田園」と「桃花源」はどちらかに内包されるべきものではなく、二つのトポスが全く性質の異なる空間であることが確認できるのである。さらに、「桃花源記」と「歸去來兮辭」とを互いに相補うテクストとして読むことも可能となろう。「歸去來兮辭」の「田園」については既に述べたところであるので、(二) 小論では、「桃花源」のシンボルが桃の果実ではなく桃の花であるということの意味を確認するところから始めたい。そのうえで、「舟」の持つ機能、「桃花源記并詩」の「記」と「詩」の関係、「桃花源記」と「歸去來兮辭」の相関性について考えていくことにしよう。

一　「桃花源」のシンボル

「桃花源記」に登場する「桃」は言うまでもなく桃の花のことである。一方、「桃花源記」の類似説話（以降、「桃源郷説話」と呼

ぶ。）に見えるのは花ではなく果実である。例えば、『述異記』説話（表１①）では、「食桃李實者、皆得仙去。（桃李の實を食らう者、皆仙を得て去る。）」とあり、桃の果実は食べれば仙人になれる食物として登場する。『幽明録』説話（表１③）では、山の頂の桃で空腹を満たしたことが不可思議な集落へと迷い込むきっかけであり、その集落でもてなされる豪華絢爛な食事にも桃がデザートとして登場している。

大室幹雄氏は桃について「それは果実だけではなく幹や枝やそれらの灰にさえ顕著な呪力―悪霊ばらいの浄化力を有している」と述べ、「桃花源記」は、「天上の神仙界にも通いあう聖なる領域が、そこでは自給自足の閉鎖的な経済体制を完備した歴史的空間に変形」し、他の説話に見える「時間のモチーフ」が欠落していると指摘している。[三] また、小南一郎氏は、桃の呪力についての論考のなかで「桃花源記」と『幽明録』説話を例に挙げて、桃林は「現世と異界との間に介在するもの」とし、「桃花源」については「自給自足的村落共同体」と解している。[四]

桃と仙界の親和性については改めて論じるまでもないが、ならば、「桃花源記」の「桃花源」もいわゆる桃の呪力と不可分な関係にあるのだろうか。呪力を持つという桃をシンボルとする「桃花源」という名と、自給自足の共同体という実体の間には少なからず距離があるのではないだろうか。そもそも、仙界と自給自足の共同体では位相の異なるものである。自給自足の共同体である「桃花源」は従来の仙界を転換させたものであるわけだが、この転換を象徴しているのがシンボルである桃の果実から花への転換であるのではないかと小論は推論するのである。

表1

	出典	元の世界 場所	元の世界 時代	動機	境界	異域	再び元の世界
	桃花源記	武陵	晋・太元	漁業	船	地形/農作物	タイムラグなし
					桃花	酒/鶏のごちそう	約束の破棄
					山中の穴	各々の家に招待	二度と辿りつけない
①	述異記	武陵/呉		（秦の乱）	乳水	桃の果実	
						「得仙」	
	*（武陵記）	武陵/黄聞川		魚釣り		（桃花源）	
	*（武陵記）	武陵/武陵川		（秦の乱）		（桃花源）	
②	異苑/荊州記	武溪	宋・元嘉初	鹿狩り	石穴/梯子	地形/農作物	二度と辿りつけない
	*（武陵記）					通行人	
③	幽明録	天台山	漢・永平五年	穀皮採集	桃/山上/川	女/建築	タイムラグあり
						宴	（晋太元八年）
						（酒食/桃の果実）	行き場を失う
④	拾遺記	洞庭山	（漢末）	薬石採集	洞穴	女/建築	タイムラグあり
						宴	（300年後）
					（明るい/異香）	（玉液/音楽）	行き場を失う

*『武陵記』は陶淵明「桃花源記」について言及しているので、『武陵記』から「桃花源記」に直接なんらかの影響を与えたという可能性は考えられない。

では、まず「桃花源記」（『陶淵明集巻六』）の桃の花の描写を見るところから始めることにしよう。

晉太元中、武陵人捕魚爲業。緣溪行、忘路之遠近。忽逢桃花林、夾岸數百歩、中無雜樹、芳華鮮美、落英繽紛。（晉の太元中、武陵の人 魚を捕うるを業と爲す。溪に緣りて行き、路の遠近を忘る。忽ち桃花の林に逢い、岸を夾みて數百歩、中に雜樹無く、芳華 鮮美にして、落英 繽紛たり。）

右に掲げた「桃花源記」のこの冒頭部から、まず想起されるのは春のうららかな風景であろう。桃の花は鮮烈な色彩イメージを与えると同時に、その季節を春と限定する。桃の花が咲くのは、春の中でもほんの限られた期間である。

『韓詩章句』曰「溱與洧、方渙渙兮」。謂三月桃花水下時、鄭國之俗、三月上巳、於溱洧兩水上、執蘭招魂續魄、祓除不祥也。（『韓詩章句』に曰く「溱與洧、方渙渙兮」と。謂えらく、三月桃花の水の下りし時、鄭國の俗、三月上巳、溱洧の兩水の上にて、蘭を執り招魂續魄し、不祥を祓除するなり。）

（『初學記』巻四、三月三日）

三月の「桃花水」の頃に鄭国では禊が行われていたのだという。この「桃花水」の語について、唐の顔師古は次のように説明している。

『月令』「仲春之月、始雨水、桃始華」。蓋桃方華時、既有雨水、川谷冰泮、衆流猥集、波瀾盛長、故謂之桃華水耳。而『韓詩傳』云「三月桃華水」。（『月令』「仲春の月、始めて雨水あり、桃始めて華さく」という。蓋し桃 方に華さきし時、既に雨水有り、川谷 冰泮け、衆流は猥集し、波瀾は盛長たり。故に之を桃華の水と謂うのみ。而るに『韓詩傳』、「三月桃華の水」と云うなり。）

（『漢書』巻二九溝血志、顔師古注）

三月上巳の頃に木々には桃の花が咲き、川には雪解けの水が溢れるので、その水を「桃華（花）水」と呼ぶのだという。その生命力に満ち溢れた季節、三月上巳に古くは禊が行われていた。魏晋南北朝時代には既に三月三日は行楽の季節とみなされるようになり、その行楽の宴での詩作が西晋の頃から文献に確認できる。[五] 試みに、その三月三日の宴に詠まれた詩を挙げてみよう。

於是我后　欽若昊乾　是に於いて我が后　欽んで昊乾に若う
順時省物　言觀中園　時に順いて物を省　ここに中園を觀る
醼及羣辟　乃命乃延　醼は羣辟に及び　乃ち命じ乃ち延ぶ
合樂華池　祓濯清川　樂を華池に合わせ　清川に祓濯す
汎彼龍舟　泝游洪源　彼の龍舟を汎かべ　洪源を泝游せん

（張華「三月三日後園會詩」、『詩紀』巻二）

張華の三月三日詩は全四章から成り、右はその第二章である。引用を省略した第一章では好い時節をことほぎ、この第二章においてはその素晴らしき日に皇帝によって宴が催されることを『尚書』の語を借りて讃え、音楽を奏でて「清川」で禊を行い、さらに、「龍舟」を浮かべて「洪源」へ遡ろうと結ぶ。「桃花源記」では漁師が舟に乗って「桃花源」に辿りついていたが、三月三日の宴を詠う詩においても舟のモチーフがしばしば登場する。舟は三月三日の行事を構成する要素として数えられていたとも言われており、[六] 「桃花源記」に見える桃の花・水辺・舟がもたらす印象は少なからず三月三日の行事と重なるものであった、ということになるだろう。

『韓詩外傳』（巻七）に「夫春樹桃李、夏得陰其下、秋得食其實。

（夫れ春に桃李を樹え、夏に其の下に陰うを得、秋に其の實を食するを得。）」とあるように、桃の果実は秋の風物である。しかしながら、先に表1で示した桃源郷説話に見える桃の果実はいずれも、桃の花のような季節感を伴っているとは言い難い。極論を述べればその季節がいつであっても物語そのものに支障はない。つまり、果実から花へのシンボルの変更は、そのシンボルである桃が示す季節の変更―不特定から春、春のうちでも限られた桃の花が咲く三月上旬の禊の時節への変更―であったと言えよう。

続いて、桃の配置された位置にはどのような変化があったのだろうか。「桃花源」では桃の樹は山穴をくぐり抜ける道程に配置され、この桃の花が漁夫を「桃花源」へと導く誘因となっている。漁夫は桃の花に誘われて前進し、その先に見つけた穴を通過して「桃花源」に辿りつくわけであるが、その「桃花源」の集落の内部に桃の花も桃の果実も存在しないことを看過すべきではない。『幽明録』（表1③）では桃は異境の中にあり、そこは桃の果実を中心とする集落であったが、「桃花源記」の桃が位置するのは「桃花源」の外縁部である。換言すれば、「桃花源」とは桃花を外郭とする集落であり、桃花によって包囲され隔離された世界なのである。桃花林は、「桃花源」という集落全体を守り、外の世界と「桃花源」との間を分断すると同時に、その境界を顕在化させる結界として機能しているとも言えよう。

この境界の顕在化は、闖入者と住民の態度にも変化を与えている。

漁人甚異之、復前行、欲窮其林。林盡水源、便得一山。山有小口、髣髴若有光、便捨船從口入。初極狹、纔通人、復行數十步、豁然開朗。…見漁人乃大驚、問所從來、具答之。便要還家、爲設酒殺鷄作食。村中聞有此人、咸來問訊。…問今是何世、乃不知有漢、無論魏晉。此人一一爲具言所聞、皆歎惋。餘人各復延至其家、皆出酒食。停數日、辭去。（漁人 甚だ之を異とし、復た前み行きて、其の林を窮めんと欲す。林は水源に盡き、便ち一山を得たり。山に小口有りて、髣髴として光有るがごとし。便ち船を捨て口より入る。初めは極めて狹く、纔かに人を通ずるのみなれども、復た行くこと數十步、豁然として開朗たり。…漁人を見て乃ち大いに驚き、從りて來たる所を問えば、具さに之に答う。便ち要えて家に還り、爲に酒を設け鷄を殺して食を作る。村中 此の人有るを聞き、咸 來たりて問訊す。…今は是れ何の世ぞと問う、乃ち漢有るを知らず、魏晉に論無し。此の人一一爲に具さに聞く所を言うに、皆歎惋す。餘人各おの復た延きて其の家に至らしめ、皆酒食を出だす。停まること數日にして、辭去す。）

漁夫は桃の花を見てもそれを手にするわけでもなく、また桃花水を口に含むわけでもない。ただ「異」に感じて桃花林の果てを見てみようと「桃花源」へと誘われていく。そして、漁夫が「桃花源」に辿りつき、「桃花源」の人々は突然の闖入者に驚く。彼らは驚きながらも、その闖入者を酒や鶏をつぶした食事でもてなし、闖入者である漁夫も人々から求められるままに元にいた世界についての話をするのである。

一方、『幽明録』説話では、遭難者たちは飢えを理由に桃の果実に迷わず手を伸ばす。

漢明帝永平五年、剡縣劉晨・阮肇共入天台山、取穀皮、迷不得返。經十三日、糧食乏盡、飢餒殆死。遙望山上有一桃樹、大有

子實。而絶巖邃澗、永無登路。攀援藤葛、乃得至上。各噉數枚、而飢止體充。（漢の明帝永平五年、剡縣の劉晨・阮肇共に天台山に入り、穀皮を取るも、迷いて返るを得ず。十三日を經て、糧食乏盡し、飢餒して殆ど死せんとす。遙かに望むに山上に一桃樹有り、大いに子實有り。而れども絶巖邃澗、永えに登路無し。藤葛を攀援し、乃ち上に至るを得。各おの數枚を噉らい、飢止まり體充つ。）

（『幽明録』）

桃を食べた後に彼らは見知らぬ集落にたどりつき、そこで迎えてくれた美しい女たちは「來何晩邪（來ること何ぞ晩きや）」と闖入者に話しかけ、何故か彼らが訪問することを予め知っているのである。さらに、女たちは豪華なごちそうや酒などで一方的にもてなし、その歓待は寝室の中にまで及ぶ。当の闖入者たちは何故これほど歓待されるのか分からない。それは、「忻怖交幷（忻怖交も幷す）」と喜びと同時に恐れを抱いてしまうほどの過剰な歓待ぶりである。『拾遺記』説話（表1④）でも、闖入者は「霓裳冰顔、艶質與世人殊別。（霓裳冰顔、艶質として世人と殊別たり。）」という明らかに普通の人間ではない美女によって迎えられ、「飲以瓊漿金液、延入璇室、奏以簫管絲桐。（瓊漿金液を以て飲ましめ、延きて璇室に入れ、簫管絲桐を以て奏す。）」として、仙界の飲み物を供され、玉で彩られた部屋で美しい音楽の調べによって歓待される。闖入者は女たちから一方的な歓待を―結果的には、彼らは浦島太郎のように時間を代償として支払うことになるわけだが―ひたすら受けるのみである。

「桃花源記」と『幽明録』説話および『拾遺記』説話との間の相違点を整理すると、次のように言えよう。まず、「桃花源記」の漁夫は桃花林の先に異なる世界があるということについて自覚的である。「桃花源」の住民の方も、その内情を知らずとも「桃花源」の外に異なる世界があることは既に知っており、漁夫と「桃花源」の住民はいずれも自分の今いる世界の外に見知らぬ世界が存在することを知っている人々である。他方、『幽明録』や『拾遺記』においては、その趣はずいぶんと異なってくる。とりわけ『幽明録』の遭難者は異なる世界の存在に無自覚である。これに対して、迎える側の女たちは遭難者の来訪をも見通しており、全知全能とも言うべき存在である。次に、闖入者と住民との関係について述べると、「桃花源記」では住民がごちそうでもてなし、代わりに漁夫は外界のことを話して聞かせ、そこには双方向の授受関係が成立しているのに対し、『幽明録』『拾遺記』では闖入者が接待をする女たちから過剰な奉仕を受けているだけの一方向の不均衡な関係である。以上から、「桃花源記」は桃源郷説話とは一線を画して、その住民たちに呪力を与えていないだけではなく、闖入者である漁夫と住民とを同等の関係として位置づけていることが確認できる。

既に述べてきたように、「桃花源記」はその時間を禊の季節に設定してはいるものの、『幽明録』などで呪力が発揮されてきた場所において、またそれ以外の場所においても呪力が発揮されることはない。本章の冒頭で桃の呪力と自給自足の共同体の間には距離があるのではないかと述べたが、では、「桃花源記」の桃とはその本来持つ力を完全に失ってしまった桃、ということなのだろうか。

結論から先に述べると、桃はその力を失ったわけではないだろう。桃の力は桃花林の結界が自給自足の共同体である「桃花源」を守っているのであり、その桃の力がいわゆる呪力とは異なっているだけ

である。「桃花源記」の桃の力について、その本質を端的に表現しているのは次の表現であろう。

其中往來種作、男女衣着、悉如外人。黄髪垂髫、並怡然自樂。

（其の中に往来し種作するもの、男女の衣着は、悉く外人のごとし。黄髪垂髫並びに怡然として自ら樂しめり。）[七]

田畑で種植えをする男女の服装について述べたあと、老人から幼子までが「怡然自樂」であると言う。この「自樂」の語は『莊子』讓王篇に見え、貧しいにもかかわらず出仕をしないのは何故かという孔子の問いに、顔回はこう答える。

「不願仕。回有郭外之田五十畝、足以給飦粥。郭内之田十畝、足以爲絲麻。鼓琴足以自娛。所學夫子之道者足以自樂也。回不願仕。」（「仕うるを願わず。回に郭外の田五十畝有り。以て飦粥を給するに足る。郭内の田十畝、以て絲麻を爲むるに足る。琴を鼓して以て自ら娯しむに足る。夫子に学ぶ所の道は、以て自ら樂しむに足るなり。回は仕うるを願わず。」）

（『莊子』讓王）

肉体の欲求を満たすにはわずかながら持っている田畑で収穫できる「飦粥」「絲麻」で十分であり、また精神の楽しみとしては「琴」を弾けば十分である、それで「自樂」することが出来るのだから、自分には出仕を求める必要などないのだ、と。過剰に外物を求めることなく必要最低限の物質で十分に満足するという意で、この「自樂」の語は用いられている。

この「自樂」の語の例を他に求めると、例えば、王逸は『楚辭』「漁父」を「而漁父避世隱身、釣魚江濱、欣然自樂。（而るに漁父世を避け身を隱し、魚を江濱に釣り、欣然として自ら樂しめり。）」と解して、「自樂」の語を漁父のあり方を示すのに用いている。陶淵明の詩文では、三月の情景を描いた「時運」詩の中にその用例を求めることが出来る。次に引用するのはその全四章のうちの第二章[八]である。

洋洋平澤　洋洋たる平津
乃漱乃灌　乃ち漱ぎ乃ち濯う
邈邈遐景　邈邈たる遐景
載欣載矚　載ち欣び載ち矚る
人亦有言　人も亦た言える有り
稱心易足　心に稱えば足り易しと
揮茲一觴　茲の一觴を揮い
陶然自樂　陶然として自ら樂しむ

（「時運」第二章、『陶淵明集』卷一）

誰かが「稱心易足」と言ったものだが、自分にとっての「稱心」は「一觴」を揮って酒を飲むことであり、酒を飲めばその心地は「自樂」である、と。ここでは心境を表す語として「自樂」が用いられ、現況の中で覚える充足を意味しており、それは「田園」で暮らす陶淵明をして酒に酔ってはじめて得られる境地であったとも言えよう。

「桃花源記」について、小川環樹氏は「桃花源」を「仙郷を人間世界に持ちこむことによって、作者の或る想念、自己の求めえなかった理想を託した」[九]と、また、川合康三氏は「possible であってもprobable でない世界」[一〇]と評した。なぜ、陶淵明の描いた「桃花源」は「理想」であったのか。あるいは、「probable でない世界」であったのだろうか。「桃花源」は仙界ではないという点で一見現実的

である。しかし、「桃花源」の人々のように限られた物資で満足を得るということは現実にはきわめて困難なことであるだろう。一人の人間（すなわち陶淵明）が充足するのも実際にはなかなか容易なことではないのに、ましてや、充足した人々のみによって構成される社会などは不可能と言っても過言ではない。陶淵明は桃の聖性をいわゆる呪力から〈自樂〉の力に転換させ、桃源郷説話の〝型〟を換骨奪胎するかたちで仙界とは全く異なる位相の理想郷として「桃花源」を描き出したのである。そして、それは結果的に新たな理想郷の〝型〟を後世の士大夫たちに提供することになったのである。

二　舟と境界

「桃花源記」では、漁夫が舟に乗りながら桃の花に誘われて水源に至り、舟から降りて山の穴を通過し、そこでようやく「桃花源」に到達する。これに対し、表1が示しているように桃源郷説話には舟が登場することはない。主人公たちはみな徒歩で異界に足を踏み入れており、そこには舟はおろか、どんな乗り物も登場しない。しかし、桃源郷説話に舟の姿が見えないことをわざわざ指摘したのは、舟の登場する異界説話は珍しく、その点で「桃花源記」は異色作なのだという結論を導きたいからというわけではない。むしろ、舟という形象は元来異界に親和性の高い乗り物である。そのことをまず確認しておきたい。試みに、筏によって天の河を訪れるという話を見てみよう。

舊説云、天河與海通。近世、有人居海渚者。年年八月有浮槎去來、不失期、人有奇志、立飛閣於査上、多齎糧、乘槎而去。十餘日中猶觀星月日辰、自後茫茫忽忽亦不覺晝夜。去十餘日、奄至一處。有城郭狀、屋舍甚嚴。遙望宮中多織婦。見一丈夫牽牛渚次飲之。…（舊説に云う、天河 海と通ず。近世、人の海渚に居る者有り。年年八月 浮槎の去來するもの有りて、期を失わず。人に奇志有り、飛閣を査上に立てて、多く糧を齎し、槎に乘りて去る。十餘日中は猶お星月日辰を觀るも、後より茫茫忽忽として亦た晝夜を覺えず。去ること十餘日にして、奄ち一處に至る。城郭の狀有りて、屋舍は甚だ嚴なり。遙かに宮中を望めば織婦多し。一丈夫の牛を牽きて渚次に之を飲うを見る。…）

（張華『博物志』巻十）

毎年八月になると筏が海上に出現することに気付いた探訪者が、その不思議な筏に乗り込む。その動機は出来心とも言うべき「奇志」であって、明確な目的があったわけではない。筏に乗るうちに突如異界に辿りつく。引用を省略した後半部では、彼は異界の人間（牽牛人）と言葉を交わすものの「岸」すなわち異界の土を踏むことはなく筏の周期に従って再び元の世界へと戻り、訪れた異界が天の河であったことを知るにいたる。この話における筏とは異界へと繋がる交通手段であると同時に、異界と元の世界の間に存在する境界そのものでもある。

異界へと通じる舟は、説話の中のみの産物ではなく詩文の中にも登場する。次に示すのは、曹植「洛神賦」である。洛川で美しい神女と出会った「余」はその神女と共に一時を過ごした後、彼女は突如光に包まれて消えてしまう。「余」はもう一度その神女に逢いたいと願い、彼女を探しに行くその場面において舟が登場する。

於是背下陵高、足往神留。遺情想像、顧望懐愁。冀靈體之復形、御輕舟而上遡。浮長川而忘反、思緜緜而增慕。夜耿耿而不寐、霑繁霜而至曙。命僕夫而就駕、吾將歸乎東路。攬騑轡以抗策、悵盤桓而不能去。（是に於いて下きに背き高きに陵り、足往き神留まる。情を遺して想像し、顧望して愁いを懐く。靈體の復た形れんことを冀い、輕舟に御りて上遡す。長川に浮かんで反るを忘れ、思い緜緜として慕を増す。夜 耿耿として寐ねられず、繁霜に霑いて曙に至る。僕夫に命じて駕に就かしめ、吾將に東路に歸らんとす。騑轡を攬りて以て策を抗げ、悵として盤桓して去る能わず。）　（曹植「洛神賦」、『文選』巻十九）

「余」は一旦、水辺に背を向けて高い山に登るが神女への思いは尽きず、もう一度彼女の姿を見るために舟に乗って川を遡る。そして、長らく川面に舟を浮かべるものの彼女は現れぬまま夜明けを迎えることとなり、とうとう彼女を探すことを諦めて車に乗って帰路につく。結果的には神女に再び会うことは実現していないけれども、この場面において、舟は異界へと、車は現実の世界へと向かう交通手段として舟と車が対照的な働きを示している。

この「洛神賦」をもとに東晋の顧愷之が描いたという「洛神賦圖」[一二]が伝わるが、この絵図の中ではより明確に舟と車が使い分けられている。神女を追う時に舟を、諦めて帰路につく時に車を描くだけではなく、曹植「洛神賦」ではその交通手段については触れていない「於是背下陵高」に相当する場面―神女のことを諦めて水辺に背を向ける場面―でも車を画面に配し、舟を異界への乗り物、車を現実世界での乗り物であることをより強く印象づけている。この一連のシーンは画巻全体のおよそ三分の一以上を占めており、「洛神賦圖」の見せ場ともなっている。「洛神賦」および「洛神賦圖」ではともに水辺を異界に連なる空間とし、舟をその異界への交通手段として描き出している。

「桃花源記」では、男が「桃花源」から元の世界に戻る場面において再び舟が登場する。穴に入るときに乗り捨てた、あの舟である。

停數日、辭去。此中人語云「不足爲外人道也」。既出、得其船、便扶向路、處處誌之。及郡下、詣太守說如此。（停まること數日にして、辭去す。此の中の人語げて云う、「外人の爲に道うに足らざるなり」と。既に出で、其の船を得て、便ち向の路に扶りて、處處に之を誌す。郡下に及び、太守に詣りて說くこと此くのごとし。）

男は穴を出て再び舟に乗り、もう一度この「桃花源」に戻ってくることが出来るようにと印をほどこしながら元の世界へと向かう。「桃花源記」では、「桃花源」と元の世界の間を往復する交通手段として舟が描かれているのである。

ここまで挙げてきた舟の例はいずれも、現実と非現実のあわいに浮かぶ舟であった。境界は地図上の国境線のようにいつも一本の線として存在するわけではない。堅く着実な陸地を離れ、つかみどころのない水の上に浮かぶという感覚もまた彼我の境界として機能しているのであろう。漁夫が「桃花源」へと向かう舟の上から眺めた、美しい桃の花が咲き誇る水辺の空間は彼我の境界そのものであったのである。前章において、桃の花・水辺・舟が三月三日の禊を連想しうるものであること、桃花林が「桃花源」を守る結界の役割をはたしていることを述べたが、「桃花源」の境界は桃花林だけではな

い。「桃花源」の境界は〝線〟ではなく、舟・桃花林・山穴といった要素が〝面〟として機能しているのである。桃源郷説話には舟が見られないにもかかわらず、「桃花源記」で「桃花源」との往復に舟が用いられていることは、陶淵明の意図的なアレンジとしてもっと注目されてよいだろう。この舟については「歸去來兮辭」との関わりの中でまた述べることにして、いまは、「桃花源記」という物語が舟というプロセスを経て「桃花源」という新たな領域に足を踏み入れているのだということを強調して、次章に進みたい。

三　「桃花源詩」

「桃花源記」は「記幷詩」[二三]として「記」の後に「詩」が付されている。しかし、「記」のみが『搜神後記』や『藝文類聚』に収められているように、「桃花源記」においては「記」が〝主〟であり、「詩」が〝従〟として読まれてきたと言ってよい。一方で、「詩」や「賦」などは韻文を作品の中心に据えて散文（非韻文）によって書かれた「序」を添えるという形式をとり、後に述べる「歸去來兮辭」もそのスタイルに則っていた。このことを確認した上で、「記」に添えられた「詩」（『陶淵明集』巻六）を見てみよう。

「桃花源詩」

嬴氏亂天紀　賢者避其世
黃綺之商山　伊人亦云逝
往跡寖復湮　來徑遂蕪廢
相命肆農耕　日入從所憩
桑竹垂餘蔭　菽稷隨時藝
春蠶收長絲　秋熟靡王稅
荒路曖交通　雞犬互鳴吠
俎豆猶古法　衣裝無新製
童孺縱行歌　班白歡遊詣
草榮識節和　木衰知風厲
雖無紀曆誌　四時自成歲
怡然有餘樂　于何勞智慧
奇蹤隱五百　一朝敞神界
淳薄既異源　旋復還幽蔽
借問游方士

嬴氏　天紀を亂し
賢者　其の世を避く
黃綺は商山に之き
伊の人も亦た云に逝く
往跡　寖く復た湮み
來徑　遂に蕪廢す
相命じて農耕に肆め
日入りては憩う所に從う
桑竹　餘蔭を垂れ
菽稷　時に隨いて藝う
春蠶　長絲を收め
秋熟　王稅靡し
荒路　曖として交わり通じ
雞犬　互いに鳴き吠ゆ
俎豆　猶お古法にして
衣裝　新製無し
童孺は縱に行歌し
班白は歡びて遊び詣る
草榮え節の和するを識り
木衰え風の厲しきを知る
紀曆の誌無しと雖も
四時　自ら歲を成す
怡然として餘樂有り
何に于いてか智慧を勞せん
奇蹤　隱るること五百
一朝　神界敞る
淳薄　既に源を異にし
旋ちにして復還た幽蔽す
借問す　游方の士

焉測塵囂外　焉んぞ塵囂の外を測らんと
願言躡輕風　願わくは言に輕風を躡み
高舉尋吾契　高舉して吾が契を尋ねん

「記」と「詩」は内容の上では重なるところが多い。しかしながら、この「詩」では「桃花源」の住人が闖入者に対して食事を振る舞うことも、外の世界での出来事を話してほしいと頼むこともない。食事どころか、ここには漁夫も桃の花さえも存在していないのである。

「記」は漁夫の視点から語られ、漁夫の体内に流れる時間が刻一刻と進むなか、「桃花源」の外側から内部への移動、「桃花源」内での住民達との交流、「桃花源」からの帰路、さらに別の人間―太守や劉子驥―による「桃花源」到達への試行を描くものであった。対して、「詩」はただ淡々と「桃花源」に住む人々の生活の様子を素描するのみである。その語りは漁夫の視点からではなく、所謂〝神の視点〟あるいは〝人称を持たない語り口〟によるものだが、結びの四句にいたって一転する。

「この世界の域内で遊ぶ方々にお尋ねしたい。塵や埃にまみれたこの俗世の外側をどうすれば知ることができるのだろうか。願わくは軽やかな風に乗って、高く舞って我が心に決めた「桃花源」を訪ねてみたい。」―ここで初めて語り手が前面に押し出され、語り手自身の願望を述べる。換言するならば、この四句にいたって初めて語り手は姿を持つのである。この結びの四句は、完成したデッサン画―前半二十八句に描いてきた「桃花源」の俯瞰図―にもたらされた画家の感慨に相当する。この四句の存在が「詩」に入れ子構造をもたらし、語り手を「桃花源」を俯瞰する存在として「桃花源」の外部に位置づけることを可能としているのである。「記」と「詩」をあわせて見るならば、その構図は「桃花源」を探訪する漁夫を描いた絵巻物を読んだ者が、それを一枚の俯瞰図に纏め、筆を擱いて歎息を洩らすものだと言えよう。

以上から、「記」と「詩」のそれぞれの特徴は以下のように纏められる。「記」は、空間の移動や時間の推移といったプロセスを重視した動的世界であった。一方、「詩」には「記」のような空間の移動も推移する時間も見られない。そこに見えるのは「桃花源」の概略とそれに対する語り手の感慨であり、「記」の動的世界とは対照的に、「詩」は静的世界を呈していると言えよう。この「記」と「詩」が持つ形式は、次章で取り上げる「桃花源記」と「歸去來兮辭」との相関性を考える上で大きな示唆を与えてくれるのである。

四　「桃花源」と「田園」

前章にて、「桃花源記」の「記」と「詩」の関係について述べたところであるが、「歸去來兮辭」では、「辭幷序」として「辭」の前に「序」が付され、例えば『文選』では「辭」のみが収録されて「序」は省略されているように、「序」は「辭」の〝従〟として読まれてきた。また、「記」と「詩」に見られた動静のコントラストは、「歸去來兮辭」にも見られるものである。「歸去來兮辭」は、「序」はある一点にとどまった状態から、「田園」外部での出来事、および「田園」に帰るにいたった経緯を過去回想として語るものであった。ここで言う「ある一点」とは、空間で言えば「田園」内部にあ

る地点であり、時間で言えば「田園」に帰った後の時点である。一方、「辭」は語り手である「余」が「田園」の外から内へと移動し、また、句ごとに、今この瞬間が刻一刻と推移するものであった。[四]「桃花源記」同様に語り手の挙止に着目すると、「序」を静、「辭」を動として、「記」と「辭」、「詩」と「序」がそれぞれ対応していると捉えることが出来る。

表2

	「桃花源」	「田園」	
記	漁夫の視点	一人称の視点	序
	時間の推移 空間の移動	現在から過去回想 現地点からの回想 （過去の「我」は動く）	
	二度の舟 （外⇒内⇒外）		
詩	一人称の視点 （無人称→一人称）	一人称の視点	辭
	現在からの回想 現地点からの回想	時間の推移 空間の移動	
		二度の舟 （外⇒内⇒内）	

「記」と「辭」に見える共通点は空間の移動および推移する時間だけではない。「記」の中に舟が二度登場することについては既に述べてきたところであるが、「歸去來兮辭」の「辭」においても舟が登場し、その回数も同じく二度である。しかしながら、「歸去來兮辭」の舟と「桃花源記」の「桃花源」を往復する舟は、その方向性が異なるものである。最初の舟は、舟という手段あるいは境界を経て新たな領域に足を踏み入れる点で「桃花源記」「歸去來兮辭」とも同一の方向性を持つと言えるが、二度目の舟では全く質の異なる方向に向かっている。この方向性の相違が両者のあり方を決定的に分けているのである。両作品を比較することで「桃花源」「田園」それぞれの在処、さらに、それぞれに込められた書き手の意図が明確になるだろう。

「桃花源記」の舟とは漁夫を乗せた舟であり、その方向性は一度目が「桃花源」の外から内へ、二度目が内から外へと向かうものであった。そして、漁夫自身が最終的に帰着する場所は「桃花源」の外側である。

一方、「歸去來兮辭」（『陶淵明集』巻五）の舟は、「桃花源記」の舟のように単純明快には捉えられない。

實迷途其未遠　實に途に迷うこと其れ未だ遠からず
覺今是而昨非　今の是にして昨の非なるを覺る
舟遙遙以輕颺　舟は遙遙として以て輕く颺がり
風飄飄而吹衣　風は飄飄として衣を吹く

右に示した最初の舟とは、語り手の「余」―陶淵明自身―が乗っている舟であり、官職を辞し「田園」でその後の人生を送る決意をして「田園」へと向かうものであった。つまり、「田園」の外側か

ら内側へと向かう舟であり、この舟が「田園」内外の境界を移動する手段として機能しているのである。

続いて二度目の舟。

農人告余以春及　農人 余に告ぐるに春の及べるを以てし
將有事於西疇　將に西疇に事有らんとす
或命巾車　或いは巾車に命じ
或棹孤舟　或いは孤舟に棹さす
既窈窕以尋壑　既に窈窕として以て壑を尋ね
亦崎嶇而經丘　亦た崎嶇として丘を經
木欣欣以向榮　木は欣欣として以て榮ゆるに向かい
泉涓涓而始流　泉は涓涓として始めて流る
善萬物之得時　萬物の時を得たるを善みし
感吾生之行休　吾が生の行くゆく休するを感ず

二度目の舟は、舟と同時に車の移動も描かれている。この舟と車は「洛神賦」の舟と車のように一方は異界へ、他方が現実世界へと正反対の方向へ進むわけではない。車・舟・舟・車の順に句を重ねており、さらに「木欣欣以向榮、泉涓涓而始流」として陸と水―車の領域と舟の領域―の描写が続く。つまり、舟と車とを交互に用いねばならない遠方の地への移動であることを示しているのである。

しかし、その「遠方」の意味するところは、単なる物理的な距離としての「遠方」と理解するべきではないだろう。二度目の舟の登場後に見える「善萬物之得時、感吾生之行休」の句以降、詩の内容がそれまでの「田園」生活の具体的な描写から万物の変化へと発展するように、この巾車と舟による遠方への移動は実際の行動としての農地への移動だけを意味しているのではない。また、二度目の舟行によって辿りついた場所に流れる時間は、これまでの詩人一人の中に流れる一方向一直線の時間ではない。詩人の意識は、春を迎えて「時」を得る万物とその中で収束に向かいつつある自身の寿命へと及び、この二度目の舟での移動をきっかけに、詩人の領域は万物の生命が流転する世界へと広がり、万物の中で連環する時間を感得するのである。二度目の舟での移動は、出仕生活をも含めてそれまで流れていた〈不可逆的な時間〉から〈永遠の時間〉への移行であるとも言えよう。とは言え、二度目の舟の帰着する場所はあくまで「田園」の内部である。つまり、一度目の舟はいわば隣接する領域への平面移動であり、一方の二度目の舟は「田園」内部における異なる位相への移動と呼ぶのがふさわしく、この舟と車の存在が、「田園」という空間に〈不可逆的な時間〉および〈永遠の時間〉という二つの異なる時間性を内包する広がりを与えているのである。

さらに、その帰着する場所に着目すれば「桃花源」および「田園」はともに舟行の出発前にいた領域から見ると異域であるが、「桃花源記」の漁夫は二度の舟行を経て元の世界に戻り、漁夫は「桃花源」を依然として異域と捉えており、彼の拠点はあくまで「桃花源」の外にある元の世界に置いている。これに対して、「歸去來兮辭」は異域であった「田園」内部にて更に移動することで、「田園」そのものの領域の広さを読み手に示しており、自らの拠点はその「田園」の中に定めている。これこそが、「桃花源」と「田園」との最大の相違である。

ここでいったん「桃花源記」と「歸去來兮辭」の成立の先後に従って、整理してみることにしよう。「歸去來兮辭」は「義熙元年（四〇五）」の作品とすることで先行研究はほぼ一致している。「桃花

源記」に関しては具体的な年代の異同はあるものの、「歸去來兮辭」の後すなわち帰隠後の作品であることが、これまでの研究においてほぼ見解の一致するところである。[二五] したがって、「歸去來兮辭」の後に「桃花源記」という順に成立したと考えて相違ない。

「歸去來兮辭」は、官職を辞して故郷の「田園」で生活を営むという決意を示した隠遁宣言である。「辭」は、刻々と推移する時間の中で、最初の舟行によって「田園」の外から内に入り、また二度目の舟行によって「田園」の領域に広がりを与えていた。一方、「序」は、既に「田園」に拠点を求めた後に、動かぬ場所から「田園」の外での過去の出来事を回想するものであった。この「歸去來兮辭」および「序」によって、「田園」の外側と内部は〈官〉と〈隠〉として明確に切り離され、また同時に、「田園」は今後の生活の場として、〈不可逆〉と〈永遠〉の二つの性質の時間を内包する広がりのある空間として定義されているのである。

続いて、「桃花源記」。「記」は、当時流伝していた桃源郷説話をプロットとしながら、そこに宿っていた呪力を〈自樂〉の力に転換させた物語で、この「桃花源」の住民はみな足ることを知る人々である。漁夫は「桃花源」にしばらく滞在したあと、再び元の世界へ戻り、その後は誰も到達することが出来ないという後日談も付されている。「桃花源」への往復の交通手段には「歸去來兮辭」同様に舟が用いられている。が、「歸去來兮辭」とは異なり、「桃花源」と漁夫の属する元の世界はいずれも〈官〉を象徴するものではなく、漁夫の視点からは「桃花源」の内外を〈官〉と〈隠〉の二項対立として捉えることは出来ない。かといって、「桃花源」の内外はどちらも〈隠〉とするには、その性質が異なるものである。そのことを強調しているのが「桃花源詩」である。「詩」には、この「記」に記された物語を俯瞰し、出来るならばその世界に行ってみたいと歎息する、語り手自身すなわち陶淵明の姿が描き出されている。「桃花源」は、「田園」の中にいる陶淵明にとって「田園」の領域外にある世界であり、言い換えれば文学の中だからこそ成立する満ち足りた理想空間なのである。「桃花源」の住民たちは「桃花源」の中で生活していたけれども、そこは実際的本来的には生活の場ではありえない。なぜなら、「桃花源」はその住民たちが皆「怡然自樂」という状態であってはじめて成立する社会であり、現実にはその実現は極めて難しい、いや不可能な社会であるからである。陶淵明の生きた東晋末から宋にかけての動乱期を思えば尚更であろう。すなわち、「桃花源」の内外を分けているのは理想と現実である。一方の「田園」は〈不可逆の時間〉と〈永遠の時間〉を併存させた空間であり、実際の生活の場を文学として昇華させた空間である。昇華させたとは言え、生活の場ゆえに喜びだけではなく苦しみもあり、時に欲望もある清濁併せ呑んだトポス、それが「田園」である。両作品の成立の順に則ると、陶淵明自らが望んで身を置いた「田園」が理想空間ではなかったからこそ、陶淵明はその「田園」で生活を営みながら、〈自樂〉に満ちた「桃花源」を理想空間として夢想したのだと解することもできよう。

「桃花源」と「田園」はいずれも〈官〉に対置される空間であるが、だからといって、それは同一の空間でも重複する空間でもない。全く質の異なる空間であったのである。

五　結び

「桃花源記」を桃源郷説話の文脈の中に置いてみると、その特異性は明らかである。「桃花源」が従来の説話に見える異界―仙界―とは異なるものであることについては先行研究の中でも指摘されてきたことであるが、小論ではそのシンボルが桃の果実ではなく桃の花であることに注目し、この果実から花への転換が、桃に宿る呪力を〈自樂〉の力へと転換を意味しているという解釈の可能性について述べてきた。桃の花は水辺や舟とともに三月三日の禊と関わりの深いものであり、「桃花源」はその桃花林の聖性によって守られた空間である。「桃花源」へと向かう道程には咲き乱れる桃花林・水辺・舟・山穴などの異界との境界が幾重にも配置され、そこが異界であることを強調しているにもかかわらず、当の「桃花源」には不可思議な力は存在しない。あるのは充足した住民たちの姿である。「桃花源記」は、この充足すなわち〈自樂〉の力こそ不可思議な力であり、皆が充足する空間はある種の異界であるということを語っているのである。

「桃花源記」の「記」と「詩」、「歸去來兮辭」の「序」と「辭」という形式に着目し、また「記」と「辭」に共通して見られる舟などの観点から、両作品を互いに相補うものとして読むならば、「桃花源」と「田園」の間に明瞭な違いが見えてくる。「桃花源」は決して「田園」ではない。「田園」もまた「桃花源」ではない。陶淵明が生活し、詩文の舞台にもしている「田園」は決して充足した理想空間などではない。だからこそ、「田園」に暮らす陶淵明は「桃花源記」に理想空間としての「桃花源」を描き出し、その場所へ行ってみたいと「詩」に詠ったのではないだろうか。

注

（一）「桃花源記」が民間説話をもとにしたものと指摘したのは管見によれば小川環樹氏「中国の樂園事象」（のちに『中国小説史の研究』岩波書店　一九六八）が最初であり、三浦国雄氏が「洞天福地小論」「洞庭湖と洞庭山」（のちに『中国人のトポス―洞窟・風水・壺中天―』平凡社　一九八八）にて『桃花源記』を「洞天福地」思想の影響を受けていることを指摘し、近年は内山知也氏、門脇廣文氏によって詳細な研究が進められている。

（二）拙論「田園と時間―「歸去來兮辭」論」（『中國文學報』第六六冊　二〇〇三）。

（三）大室幹雄「桃と棗の時間論」（『囲碁の民話学』岩波書店　二〇〇四、初出は一九七七、せりか書房）。

（四）小南一郎「桃の伝説」（『東方学報』京都　第七二冊　二〇〇〇）、七〇-七一頁。

（五）釜谷武志「三月三日の詩―両晋詩の一側面―」（『神戸大学紀要』第二二号　一九九五）、八六-八九頁。

（六）守屋美都雄訳注・布目潮渢補訂『荊楚歳時記』（平凡社　一九七八）三月三日の行事の項に『文選』巻四の南都賦に「是に於いて暮春の禊、元巳の辰、軌をならべ、軫を齊しくして陽瀕に祓う。朱帷網を連ね、野に曜き、雲に映じ、男女姣服して駱駅繽紛たり…」とあり、河沿の行樂のみならず船を浮かべることもあったことは、『文選』巻三の東京賦に「清池に造舟し、惟だ水泱泱たり」とあり、また晉の張華の太康三年三月三日後園会の詩に「清川に祓濯し、汎汎たる彼の龍舟、渚源

に泝遊す」（『全晉詩』巻二）とあるので知られる」（一二五頁）とあり、この行事と舟の関わりが指摘されている。

（七）この「外人」の解釈については諸説あるが、小論では「漁師の目から見た異域の人」という解釈を支持する。坂口三樹「桃花源記「外人」贅説」（『漢文教室』一八〇号　一九九五）に詳しい。

（八）「人亦有言　稱心易足」、一作「稱心而言　人亦易足」。

（九）小川環樹「中国の楽園事象」（『中国小説史の研究』岩波書店　一九六八）、三一〇頁。

（一〇）川合康三「桃花源記を読みなおす」（『説話論集』第十四集　清文堂出版　二〇〇四）、十七頁。

（一一）異界と交通する舟の例として、他に干寶『搜神記』巻十六「曹公船」説話が挙げられる。この話においては、漁師の船および幽霊船である曹公の船それぞれが水面に浮かび、両者の船が彼我を分けている。

（一二）顧愷之「洛神賦圖」模本は北京故宮博物館、台北故宮博物院ほか遼寧省博物館に所蔵される。

（一三）橋川時雄（『陶集版本流攷」攷餘一　『文字同盟』影印本　第三巻　汲古書院　一九九一）、伊藤直哉（『桃源郷とユートピア』春風社　二〇一〇）は、「記」と「詩」は別の作品であったのではないかとしているが、小論ではこの「記」と「詩」を一篇の作品として見る。また、川合康三氏は先掲論文の中で「桃花源記」の「記」と「詩」から成る形式について「斬新なスタイル」（六頁）と述べている。

（一四）拙論、先掲論文。

（一五）陶淵明の作品成立時期について、「歸去來兮辭」は、序文に見える「義熙元年（四〇五）」（一海知義氏は義熙二年を主張）としてほぼ諸説一致する。一方、「桃花源記」の推定年代の見解は諸説あるが、陶淵明の享年を五六歳だと主張する梁啓超と李辰冬が帰隠以前の成立を主張するほかは、帰隠後の成立という点は概ね一致するところである。

執筆者紹介（2）

●佐々木　聡（ささき　さとし）

・一九八二年生、東北大学博士課程在籍

・東北大学博士課程在籍

・「漢代の呪詛事件に見える巫者と「婢」の存在形態について」（『集刊東洋学』九九号、二〇〇八年）。「『女青鬼律』に見える鬼神観及びその受容と展開」（『東方宗教』一一三号、二〇〇九年）。『『白澤圖』輯校――附解題」『東北大学中国語学文学論集』一四号、二〇〇九年）。

●渡邉　登紀（わたなべ　とき）

・一九七七年生、京都大学大学院人間環境学研究科博士後期課程単位取得退学

・京都大学非常勤講師

・「田園と時間――陶淵明「歸去來兮辭」論――」（『中國文學報』第六十六冊、二〇〇三年）。「湛方正と官の文学――東晋末の文学活動」（京都大学大学院人間・環境学研究科『歴史文化社会論講座紀要』第八号、二〇一一年）。